

第2部

第10回 中学生長崎平和の旅



平和祈念像前にて

参加生徒

板橋第二中学校 堀田 旺太郎

志村第五中学校 佐藤 那々子

赤塚第二中学校 佐藤 平和

板橋第五中学校 金澤 暉

中台中学校 和久 唯杜

高島第一中学校 宮本 光

志村第二中学校 小幡 芽衣

上板橋第二中学校 森 姫香

高島第三中学校 澤田 緑咲

志村第三中学校 浅田 遼太

桜川中学校 長谷川 結

引率者

志村第二中学校

山口 敦校長(団長)

長尾 知真子教諭(指導員)

上野 稔教諭(指導員)

中学生長崎平和の旅 行程表

実施期間 令和4年8月8日～10日（2泊3日）

8月8日(月)

時 間	行 動 内 容
7:00	板橋区役所集合・出発式
7:30	板橋区役所 発
8:40	羽田空港 着
9:55	羽田空港 発
12:00	長崎空港 発(観光バスで平和公園へ)
13:10	平和公園 着
13:40	★青少年ピースフォーラム受付
14:00～17:00	★開会行事(被爆体験講話) ★被爆建造物等のフィールドワーク(浦上天主堂コース)
17:15	平和公園 発
18:35	ホテル 着
19:30	夕食
22:00	就寝

8月9日(火)

時 間	行 動 内 容
6:00	起床
7:00	朝食
7:45	ホテル 発
8:50	平和公園 着
10:40～11:45	平和祈念式典参列
12:00	昼食
13:30～16:15	観光
17:00	ホテル 着
18:00	学習会
19:30	夕食
22:00	就寝

8月10日(水)

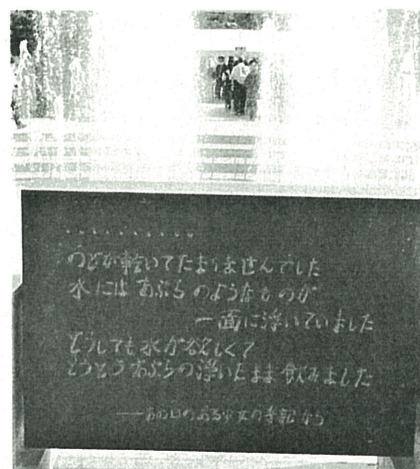
時 間	行 動 内 容
6:00	起床
7:00	朝食
8:10	ホテル 発
9:00	原爆落下中心地 着(献花、折鶴奉納)
9:30～11:00	長崎原爆資料館・追悼平和祈念館見学
11:10	長崎原爆資料館発
12:00	昼食
13:00	長崎空港 着
13:30	長崎空港 発
15:15	羽田空港 着
15:45	羽田空港 発
17:20	板橋区役所 着・解散式

★は青少年ピースフォーラム事業(長崎市主催)

長崎に学ぶ

第10回中学生長崎平和の旅
団 長 山 口 敦
(志村第二中学校長)

長崎の平和公園に向かうエスカレーターを下りるとすぐ、目の前に平和の泉があります。平和の泉の正面の石には「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました」と、被爆当時9歳だった山口幸子さんの手記が刻まれています。当時の悲慘な情景がありありと目に浮かび、心が締め付けられる思いでした。読む者の心に強く平和を誓わせます。



コロナ禍による3年ぶりの実施とロシアによるウクライナ侵攻という、現実に紛争が続く中で実施された今回の中学生平和の旅は、教科書や映像等だけの知識でしかなかった長崎の原爆について、被爆者からの話を自分の耳で聞き、今なお残っている原爆の爪あとを自分の目で見て確認し、ピースフォーラムのボランティアの人たちとの交流、そして被爆者の強い願いが込められた平和祈念式典から「平和の尊さ」を肌や心で感じる事ができた大変貴重な体験であったに違いありません。今回参加した11名の生徒たちにとって長崎が「平和を考え、平和を誓い、未来を考えるスタートの場所」になったことと思います。

事後の学習会を通して、生徒たちに大きな疑問が生まれました。それは、「戦争を繰り返さないようにしようって、みんな同じことを言っているのに、結局繰り返してしまっている。なぜだろう。」ということです。中学生がこのように平和について語り合う機会を作ることによって、平和とは何なのかを発信し続けることが大切なのでしょう。答えを出すことが難しくても、お互いに意見を交換して「考え続ける」こと、この普遍的な価値を大切にしてもらいたいです。

平和祈念式典で、長崎市長による平和宣言の中で次のようなフレーズがありました。「微力だけど、無力じゃない」。まさに今回参加した生徒一人一人の力は大変微力だと思います。しかし、決して無力ではありません。

参加した生徒は、長崎で感じたこと、学んできたことや感じたことを、家族、友人、学校の生徒・先生、地域の方々、次の世代へと語り伝える伝承者になってくれることを心より願っております。

結びになりますが、このような機会を与えてくださり、また企画・諸準備・当日の運営・引率などにご尽力を賜りました区当局の皆様、ご協力をいただきました保護者の皆様、学校関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

無常

板橋第二中学校 8年 堀田 旺太郎

77年前の8月9日午前11時2分、原子爆弾が長崎に投下されました。たった一発の原子爆弾は、それまで当たり前だったはずの人々の日常、笑顔、更には生命を一瞬にして奪いました。

私は長崎平和の旅に参加し、被爆地長崎で様々なことを見聞きする機会を得ました。この貴重な体験の中で、深く強く印象に残ったことが二つあります。

まず一つ目は、平和祈念式典に参加したことです。平和祈念式典は、高校生により司会進行されました。被爆者の合唱団である「ひまわり」の方々は、「もう二度と」という歌を歌いました。老若男女問わず皆が平和を実現するための取り組みを行っていました。また、平和祈念式典の中で高校生平和大使の方々が、「微力だけど無力じゃない」という合言葉を紹介してくれました。このように、戦争経験者だけでなく、様々な人が主体的に参加し、平和の尊さを改めて確認し、参加者全員が戦争を二度と起こさない誓いをしました。平和は決して当たり前のことではなく、皆が戦争の過ちを繰り返さないという気持ちを持つことによって初めて平和が成立するのではないかと感じました。特に、唯一の被爆国である日本の一人の国民として、戦争の悲惨さや平和の尊さを日本国内だけでなく世界に向けて発信していくことの責任を強く感じました。

また、被爆者代表の宮田隆さんのお話を伺うことができました。77年前のあの日、原子爆弾の爆風によって当時5歳だった宮田さんの小さな体は8畳間から玄関口まで吹き飛ばされたそうです。宮田さんのお話は、あまりに悲惨で恐ろしく、まるで77年前の8月9日その日その場に自分がいるかのような気持ちになり、平常心でお話を伺うことはできませんでした。また、原子爆弾の恐ろしさ、平和の尊さを改めて感じました。

二つ目は、長崎原爆資料館でのことです。私達は、胎内被爆者のボランティアの方に原爆資料館を案内していただき、原子爆弾に関する詳しい情報を知ることができました。原子爆弾の熱線によってガラスが溶けたというお話には、とても驚き、怖くなりました。原爆の威力は驚異的であり、被爆者の方々の苦しみは想像をはるかに超えるものでした。

今回の長崎平和の旅で、これまで知らなかった様々なことを知ることができ、戦争の悲惨さや平和の尊さについて自分なりに考えるようになりました。これは実際に被爆地に行き、現地で様々なことを見聞きできる貴重な体験だったからこそだと思います。この貴重な体験を活かすため、この体験で得た学びを学校の仲間や家族にも知らせ、平和について語り合う機会を持ちたいと思いました。今の平和は常ではありません。だからこそ、皆でより平和について深めていきたいと考えています。

人々を襲った核兵器

板橋第五中学校 8年 金澤 逞

1945年8月9日午前11時2分、米軍機『ボックスカー』が投下し、長崎市の上空500mで爆発した原子爆弾『ファットマン』は長崎の街とそこでの人々の暮らしを一瞬にして破壊しました。

私は長崎平和の旅で長崎に投下された原爆の威力や被害、原爆投下に至るまでの経緯などを学びました。

〈青少年ピースフォーラム〉

青少年ピースフォーラムでは、被爆体験講話会と被爆建造物等の見学を行いました。

被爆体験講話会では、爆心地から逃げてきた人々のひどい火傷や怪我などの、想像を絶する原爆投下による被害が語られ、地獄のような被爆直後の様子の話がとても印象に残りました。

被爆建造物等の見学では、浦上天主堂付近を中心に原子爆弾が当時の建造物に与えた被害の大きさを実感しました。特に印象的だったものは被爆当時の地層が見える場所です。原爆投下の被害を受けた場所を復興する際、がれきの山と化した長崎の地の上に新たに地面が盛られたことで、被爆後のがれきが地層の一つとして残っています。その地層には生活に使われていた茶碗などの食器などがあり、原爆が建造物に与えた被害の大きさを物語っていました。

〈長崎原爆資料館・追悼平和祈念館見学〉

長崎原爆資料館の見学では原爆投下直後の被害や、放射線の被害、原爆開発の歴史などの原爆に関する知識を、被爆地から回収された多種多様な展示物から多く得ることができました。そのなかでも特に印象的だった展示物をいくつか紹介します。1つ目は頭の一部がくっついているヘルメットです。原爆の熱線によって、ヘルメットの鉄が溶け、着用していた人の頭とくっついたものです。2つ目は天井に刺さった照明です。原爆の爆風によって照明が動き、勢いよく天井にぶつかって刺さったものです。3つ目はケロイドの模型です。ケロイドというのは熱線などで受けた傷の修復時に組織が以上に増殖することで赤く盛り上がる病気で、被爆者に多く見られたものです。

〈最後に〉

今回の長崎平和の旅で私は原爆の悲惨な被害について、見て、聞いて、学習することが出来ました。私はこのような恐ろしい被害を与えた核兵器が二度と使われないうちに、もっと多くの核兵器に関することや世界情勢などについて学び続け、それを多くの人に伝え、核兵器の使用を回避するための方法について考えていきたいです。

平和な世界へ

志村第二中学校 8年 小幡 芽衣

被爆体験を聞き、被爆建造物を見て、被爆地を歩く。自分で体験することによって、普段の生活の中では感じられないものを感じることが出来ました。

青少年ピースフォーラムでは、被爆者の山田一美さんによる被爆体験講話を聞き、浦上天主堂や爆心地公園などの被爆建造物のフィールドワークをしました。被爆体験講話を聞いているうちに話にのめり込んでいき、その当時にタイムスリップしてしまったかのような気持ちになりました。それは「怖い」を通り越した言葉に表せない気持ちです。心が痛いというか、とても聞いているのが辛かったです。山田さんは最後に「戦争だけは起こしてはいけない」とおっしゃっていました。この言葉を繋ぐことができるのは、これに参加した私たち若者なのだと思います。被爆建造物のフィールドワークで一番印象に残っているのは鐘楼ドームです。鐘楼ドームは当時のままに赤レンガの色も残ったままあるので、本当に爆風で落ちてしまったのだと実感しました。

そして平和祈念式典に参列し、原爆犠牲者へのご冥福と世界平和を祈りました。黙とうの時、頭の中にあの原子爆弾が落ちて長崎の町が一瞬で破壊され多くの人が苦しんでいる姿が浮かびました。私は長崎平和宣言の言葉、全てがずっと心に残っています。今が平和を訴える時！と強く思いました。ロシアが核兵器を使う前に、中国が台湾を攻撃する前に、世界に日本が平和の大切さ、戦争の悲惨さを伝えるのです。でも私が世界に伝えることは出来ません。私にはそんな大きな力はありません。だからと言って何も出来ないわけではないです。長崎平和宣言で「微力だけど無力じゃない」という言葉がありました。それは私の合言葉になりました。微力だけど無力じゃない、だから身近な人から少しずつ伝えていこうと決めました。私たちが伝える。それが使命です。

私は平和の旅で、平和について考えていました。旅に行く前は戦争がない世界が平和だとずっと思っていました。でも戦争がなくても、いじめや差別、虐待などある世界は、平和と言えるのでしょうか。戦争がない世界はもちろん平和です。でも身近に目を向けて苦しんでいる人がいたら、世界は平和とは言えないかもしれません。身近に苦しんでいる人がいたら助けてあげる、それが大きくなったものが国同士の助け合いなのではないかと思っています。

「微力だけど無力じゃない」この言葉を合言葉に、身近な人から平和を伝え、みんなが平和に楽しく過ごせるように努力していきたいと思っています。

戦争を伝えること

志村第三中学校 8年 浅田 遼太

1945年8月9日11時2分、長崎に原爆が落とされました。たった1つの爆弾で町は吹き飛び、人々の暮らしが一瞬にして奪われました。あの日から77年経ち、2022年2月24日、ロシアによるウクライナ侵攻が始まりました。私は今まで昔のここのように感じていた戦争が急に身近に感じて、日本で起きた戦争がどのようなものだったのかを知りたいと思い長崎平和の旅に参加しました。

【被爆体験講話】

青少年ピースフォーラムでは、山田一美さん(被爆当時12歳)が当時の出来事を詳しく話してくださいました。「爆心地付近の大橋ではたくさんの焦げた人の死体が流されていた」、「爆心地から近い順に人々が放射能の影響で死んでいった」など、私は改めて原爆の非人道性、残虐さに気付かされました。

【平和祈念式典】

平和祈念式典では、被爆者の方々が歌う「被爆者合唱」や「献水」、「献花」などが行われました。「長崎平和宣言」では長崎市長の田上富久さんが話した「微力だけど無力じゃない」という言葉に私は感銘を受けました。中学校2年生の私が1人で戦争反対！と声を上げてなかなか世界中に声を届けるのは難しいかもしれない。でも大勢の人たちが声を合わせていけば、戦争のない世界がいつか叶うかもしれないと思いました。

【原爆資料館】

原爆資料館では、原爆により真っ黒に焦げた人や、熱線で顔の半分が腫れ上がっている人が写真付きで展示されていて、思わず目を背けたくなるようなものがたくさんありました。また、爆心地付近の遺品も展示されていました。遺品の中には真っ黒になった弁当箱があり、原爆が落ちてくるまではいつもと変わらない日常だったのだと感じました。

【最後に】

被爆者の平均年齢は約84歳。この戦争を体験した方々が減っていく中、長崎に行き、原爆資料館を訪れたこと、戦争体験者からの話を伺えたことは、貴重な経験でした。戦争体験者が辛い記憶を言葉にして私達に話して下さったことは、戦争を知らない世代に伝えなければいけないと思っているからだと考えます。私はその気持ちを受け止めて、戦争体験者からの話を聞いた者として後世に伝えていきたいです。

微力だけど無力じゃない

志村第五中学校 8年 佐藤 那々子

私は世界が平和になることを望んでいますが、そのために何ができるのか。

私にとって今回の長崎平和の旅は、私自身が恒久平和に向けて取るべき行動が分かり、日本や世界の一員として平和について考えなければならないと思うような貴重な経験となりました。

皆さんは、『死の同心円』という言葉聞いたことがあるでしょうか。これは、一日目のピースフォーラムで被爆体験講話をしてくださった、山田一美さんが紹介していた秋月辰一郎氏の著書の一節です。これは、爆心から同心円状に死が迫り寄ってくることを表しています。「今日はあの線までが死んだ。翌日はその家よりも百メートル上の人が死ぬだろうと思っていると、はたして的中する。」(秋月辰一郎『』より引用)

そんな風に、爆心から自分の方へとどんどん死が近づいて来ることを想像すると、本当に恐ろしいと思います。そしてそれは、老若男女問わず近づいてくる恐怖なのです。もし、また同じようにこの地球上のどこかで核兵器が使われてしまったら、同じ恐怖を味わう人が現れてしまいます。それは絶対に避けなくてはなりません。

また翌日8月9日の長崎原爆犠牲者慰霊平和式典での被爆者代表、宮田隆さんのお話で被爆者の魂の叫びを感じました。私たち参列者には、式次第、式辞や平和宣言での言葉、合唱曲の歌詞などが書かれた冊子が配られ、私たちはそれを見ながら式に参加することが出来ます。宮田さんの平和への誓いの言葉の時も、私は冊子に書かれた全文を目で追いながらお話を聞いておりました。しかし、冊子には書かれていない言葉を足したり、強調したいところは表現を替えたりして、全世界に向けた言葉を発信されていました。唯一の被爆国である日本から世界に平和を誓うという大きな場面で、宮田さんの心からの本当の強い思いを感じ、思わず感動して涙を流してしまいました。

語り部の山田さんが次世代の私たちに望んでいることについて質問を受けた際、「戦争だけは絶対に起こしてはいけない。話し合いで解決し、武力は使わない。そうした指導者を選んで欲しい」とおっしゃっていました。また、被爆者代表の宮田さんは、平和への誓いで「強い意志で、子、孫の時代に『核兵器のない世界実現への願い』を引き継いでいく」と誓っていました。私たちは、こうした被爆者からの思いや行動を受け継がないといけない大事な世代です。一人ひとりが被爆者からのバトンを受け継いでいくことは大変微力ではあるかもしれませんが、世界が平和へと着実に進んでいくうえで、必ず必要であり、決して無力ではありません。これから、平和に向けて、小さなことでも行動し、被爆者の思いを次の世代へと繋げて、被爆者が望んでいる未来を作りたいと思います。

「伝える」の大切さ

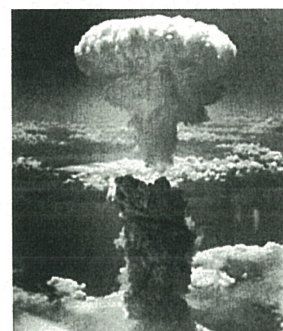
中台中学校 8年 和久 唯杜

1945年8月9日午前11時2分。皆さんはこの日付を聞いて何を思い浮かべますか？この日は長崎県に原子爆弾が落とされた日です。たった一発の原子爆弾により、家々は吹き飛び炎に包まれ、黒焦げの死体が散乱する中を多くの人々が逃げまとい、長崎県は一瞬にして廃墟となりました。皮膚が垂れ下がりながらも家族を探し、さ迷い歩く人々や、黒焦げの子どもの傍らで、呆然と立ちすくむ母親や、街のあちらこちらで地獄のような光景があったと、語っていました。十分な治療を受けられず、多くの人々が亡くなりました。凄まじい熱線と爆風と放射線は、7万4千人もの尊い命を奪い、7万5千人の負傷者を出し、かろうじて生き残った人々の心と体に、77年立った今も癒えることのない深い傷を刻み込んだと語っていました。

青少年ピースウォークでは被爆体験講話として、当日12歳だった山田一美さんが戦争当時の様子と、原爆が投下されたときの長崎市の様子について語ってくれました。山田さんは6年生になったばかりでした。そのころは、1時間目が始まってすぐに警戒警報が毎日なっていたため、勉強にならなかったそうです。1945年8月9日、その日、山田さんは友達と喧嘩して家を飛び出し、通りかかった新聞配達の人に、「俺が代わりにやるよ」といい新聞配達を手伝い、ちょうど家に帰ろうと歩き始めた瞬間、あたりが真っ白になり、山田さんはとっさに伏せたそうです。伏せていた状態でも眩しく、猛烈な熱さに襲われました。まさしくこの瞬間に長崎上空に原子爆弾が炸裂しました。

今の日本は蛇口をひねれば水が当たり前のように出て、近くのスーパーに行けば、当たり前のように食べ物が沢山陳列されていて、食べる物に困ることはありません。しかし、77年前の日本では、それが当たり前では無かったのです。戦後裕福な日本に生まれてきた私達にとっては、当時の状況の深刻さを完全に理解する事はできません。だからこそ、こんな世界を二度と作ってはいけないと、心の底から強く感じました。

「長崎平和の旅」に参加して、私が学んだことは、たった一発の爆弾が何千、何万もの人々の尊い命、生活そして未来を奪い、心と体に深い傷を与えた事実を決して忘れてはいけないと、改めて考えさせられました。現在の日本社会は、平和への認識が薄れているといわれています。その為に、戦争の残酷さを、私達若い世代が伝えていく必要があると思いました。「微力だけど無力じゃない」私はこの言葉を自分の合言葉にしていき、そして平和の大切さを伝えていけるように頑張っていきます。



原子爆弾がなかったら

上板橋第二中学校 8年 森 姫香

1945年8月9日午前11時2分、長崎の上空で1発の原子爆弾が炸裂し、多くの人々、そして長崎の美しい街並みを焼き尽くしました。あの出来事からもう77年もの月日が流れ、今もなお生き残った被爆者を苦しめていることを皆さん知っていますか？私はこの3日間でたった1つの原子爆弾がもたらした惨状、現在の平和のありがたみを全身で感じました。

【被爆体験講話】

今回、体験講話をしてくださったのは被爆当時12歳だった山田 一美(やまだ かずみ)さんという方です。山田さんは爆心地から約2kmのところまで被爆しましたが、岩陰に隠れていたため、怪我もなく無事だったそうです。山田さんは原爆が落とされるまでの解説や当時の日常、被爆した人の最期の様子についてもお話してくださいました。特に被爆者の最期は想像を絶するものでした。熱線によって皮膚がただれ、中の肉がみえてしまっている人、爆風によってガラス片が刺さっている人、中には内臓がとび出して亡くなっている人もいたそうです。私はこの話を聞いて原爆の恐ろしさを学び、まわりの人々に伝えていきたいと改めて感じました。

【原爆資料館】

原爆資料館では爆風・熱線・放射線の被害を分かりやすく観覧することができます。例えば爆風によって崩れた瓦礫や熱線によって真っ黒焦げになったお弁当箱などです。その中で一番印象に残っているのはとある写真です。その写真は原爆によって真っ黒焦げになった母親と赤ちゃんの写真でした。私が写真の悲惨さにひたっているとき、ガイドさんが教えてくれました。

「原爆が落ちた瞬間、写真のお母さんは本能で

この赤ちゃんを守ろうとしたんだよ」

言われてしてみると、赤ちゃんの腹部だけは全く焦げていませんでした。写真の母親が我が子を守ろうと身を呈したのだと気づくと悲しい気持ちやこの親子の幸せな人生を奪った原爆を憎たらしくも思いました。しかし、その事実を今になって悔いてもしょうがありません。原子爆弾の犠牲を無駄にせず、平和な世の中をこれからの未来を担う私達がつくっていかねばならないと思いました。

【最後に】

私はこの3日間で原爆・戦争の恐ろしさを学びました。原爆投下というこれから遠のいてしまう過去を皆が忘れないよう自分で伝えていきます。

原子爆弾によって亡くなられた方へ哀悼の誠を捧げます。

「長崎平和の旅」に参加して

桜川中学校 8年 長谷川 結

今回、「長崎平和の旅」に参加させていただいて、様々な体験をもとに原爆の脅威について、深く学習することができました。どれも大変貴重な体験でしたが、そのなかでも特に印象に残ったことが二つあります。

一つ目は、被爆者の山田一美さんによる被爆者体験講話会です。1945年8月9日午前11時2分、当時12歳だった山田一美さんは新聞配達をしていたとき、原子爆弾が投下されました。「最初にピカーっとあたり一面を白い光が包み込みました。そしてだんだん、肌が焼けるように空気が熱くなっていったのです。」山田さんは被爆地より2.3kmの路上で被爆しましたが幸いにも岩陰に隠れていたため、怪我もなく無事だったそうです。空気が少し冷えてきてから外に出てみると長崎は焼け野原となり無残な姿に変わり果てていました。建物は崩れ、人々は大きな火傷を負い皮膚が剥げて意識がないように歩いていました。また山田さんは多くの人が水を求めて川などに集まっていたため水の中には死体がゴロゴロ転がっており水も流れないほどだったと当時の様子を表した絵で説明してくださいました。

二つ目は、長崎原爆資料館の見学です。長崎原爆資料館には原爆の熱風でドロドロに溶けたガラス瓶や、ガラスが突き刺さり、穴があいて血のにじんだ服、熱風によって一瞬で体が真っ黒い炭になってしまった人や放射能の後遺症で全身が赤く腫れあがってしまった男性の写真などが展示されていました。

その中でも特に心に残ったのは核保有国とそれぞれの国の核兵器の数を表した模型です。

今、世界中の人が核兵器の恐ろしさや脅威を訴えているにもかかわらず、未だに戦争や核兵器はなくなりません。私はその核兵器の多さに驚くと同時に、恐怖感を覚えました。日本は今、戦争をしているわけではありませんが原子爆弾がなくならない限り、たとえ今が平和でも、戦争の恐ろしさや核兵器の恐怖が消えることはないと感じた展示物でした。

私は今回、これらのことを通じて普段はできない貴重な体験をすることができました。様々な体験を通して原爆の脅威や恐ろしさを学ぶとともに、戦争という武力で解決をする愚かさを知ることができました。

しかし、平和が生まれることはなく憎しみや悲しみが生まれてしまうのが戦争だと皆、分かっているはずなのに、未だに世界では多くの核兵器があり戦争も起こっています。今もどこかで罪のない人々が被害にあい、大切な人たちを失っているでしょう。そんな人々を少しでもなくすために私たちができることは、過去に起こった悲惨な出来事を伝えていくことだと感じました。今回の旅で私たちが学んだ貴重な体験を生かし伝えていくことによって、より多くの人々が戦争に関心を持ち、核兵器や戦争の愚かさを知り、まさに続いているこの憎しみと暴力の連鎖を断ち切ることができるのではないかと思います。

明日へつなぐ平和のために

赤塚第二中学校 8年 佐藤 平和

長崎に原爆が投下されて 77 年。私達は平和の尊さ、そして戦争と原爆のもたらす愚かさを学び、考え、伝えるため、長崎平和の旅に参加しました。

1日目のピースフォーラムでは、被爆者の山田さんから被爆体験講話を伺いました。当時 12 歳だった山田さんは、爆心地より 2.3km の路上で被爆しました。幸い岩陰にいたため、無事だったそうです。その後自宅近くの溝から見た、意識が虚ろな人々が水のある場所へ黙々と歩いてゆく光景はとてもおぞましかったと語っています。「原爆の無差別性、非人道性を知ってもらいたい。」「戦争をおこさない、原爆を生まない指導者を選んでほしい。」山田さんの伝えるその言葉は、全世界に響くべきものだと思います。

2日目は、平和祈念式典に参加しました。正式な名称は、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典といい、記念ではなく、平和を祈って祈念と書きます。式典では「長崎を最後の被爆地に」というフレーズを複数回聞きました。そこには、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を強く願う気持ちが込められていて、それを伝えることの使命を感じました。また、世界では依然として「核兵器の威嚇によって自国を守ろう」という考え方が存在し、核兵器廃絶への道はますます険しいものになっていると思います。「持っていても使われることはない」という意識は、現在のロシアによるウクライナ侵攻によって崩れようとしています。「持っている限りは使われる」。戦争によって、核兵器使用の危機に直面しているということを「今」、私達は認識しなければいけないと思いました。

3日目は、献花、折鶴の献納をした後、長崎原爆資料館に行きました。そこでボランティアガイドの平和案内人の方より原爆についての情報を伺ったり、被害の様子を見たりしました。11時02分で止まった時計、焼き場に立つ少年の写真は、原爆の深い傷を表していて、衝撃を受けました。

私が平和の尊さについて学んだ機会はそれだけではありません。長崎から東京への飛行機を待っている時に、たまたま居合わせたご高齢の女性と話しました。祈念式典にいた方ですか、と話しかけられ、「原爆を若い人が知ってくれて感動しました。」とっていただけました。長崎が被災地だと印象づけられたひとときでした。東京へ行く理由を伺ったところお孫さんに会いにいかれるそうでした。戦後受け継がれてゆく平和や命があることを実感しました。またピースフォーラムや祈念式典の開催は、学生を中心に準備されており、「微力だが無力じゃない。」を基に若い人々が自ら平和への道を切り拓いていく姿に心を動かされました。

長崎平和の旅を通して、戦争や原爆を「昔」ではなく、「今」として考える事ができました。そんな貴重な経験をさせていただいたのは、区役所の方、先生方、大勢の方のおかげだと思います。心より感謝いたします。

平和であることの幸せ

高島第一中学校 8年 宮本 光

長崎平和の旅で一番感じた事、それは【平和であることは当たり前ではない】ということ。戦争・核兵器をなくす運動が世界各地で行われているにもかかわらず、今もウクライナで戦争が起こっている。

戦争はダメ！と声を上げてその声は届かず戦争が、殺し合いが起こる。

平和であることはとても難しく遠いことなのだと感じる。

長崎平和式典出席の際に聞いた、高校生平和大使たちの合言葉「微力だけど無力じゃない」という言葉。

私は今まで一人の力で世界が平和になることはない。

核兵器はなくなる。と内心思っていた。

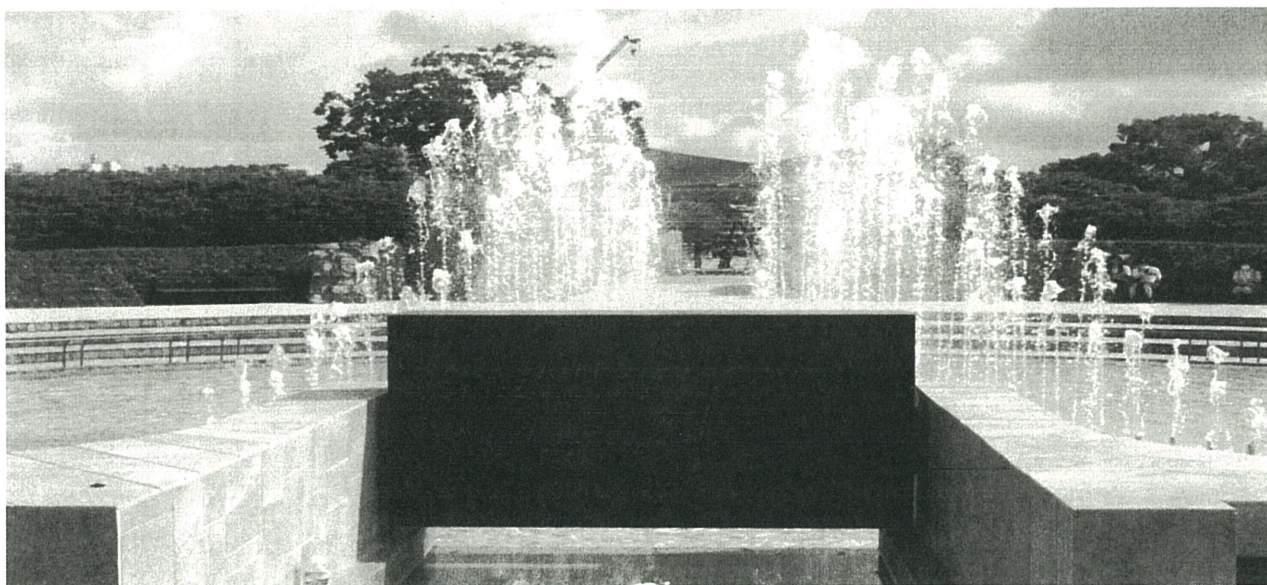
けれどこの合言葉を聞き、私一人の言葉にも力があるのだと感じた。

核兵器は絶対に使ってはならない。

戦争はダメ。

一人の力は無力ではない。

これからも強く願い、言葉にして伝えていきたい。



平和を世界中に

高島第三中学校 8年 澤田 緑咲

被爆体験講話

1日目に私達は、青少年ピースフォーラムに参加しました。青少年ピースフォーラムは、長崎の青少年（15歳から29歳）の皆さんが企画・運営をしているもので、被爆体験講話や被爆建造物等フィールドワーク、平和祈念式典の司会者をしています。そのプログラムの中の一つ、被爆体験講話では、被爆当時12歳だった山田一美さんに話を聞きました。最初になぜ長崎に原爆が落とされる事になったのか、自分の身近な人が原爆を落とされて1週間も経たずに死んでしまった事や学校では勉強が少ししかできなかった事などを話してくれました。私が、特に考えさせられたのは質問に対しての応答です。生きていて良かった事はなんですか？この質問に山田さんは、「毎日ですかね。」と即答した後に、続けて「あの時に、生き延びていなければこのような機会はなかったと思いますし。」と少し涙ぐみながら語っていました。また、今に残したいものはありますか？と言う質問には「戦争だけは残せないですね。また、そういう指導者を選挙では選んでほしいですかね。」と若い世代の私達に託すかのように微笑んで答えてくれました。

長崎原爆資料館

最終日に私達は、原爆が落とされた時の状況がわかる物や原爆の後遺症について学びに長崎原爆資料館に行きました。3つの班に分かれてそれぞれの案内人さんに原爆当時の事について説明を聞きながら館内を見て回りました。館内には原爆地から見つかった様々な物があり、原爆の威力を物語っていました。特に私が興味深かったのは原爆中心地から何キロメートル離れた距離のレンガです。レンガは中心地に近づくにつれて黒く、原型をとどめていませんでした。また中心地からかなり離れていても黒くなっているレンガを見て放射線の強さなどがどれほどのものだったのかが分かり恐ろしく、核兵器の前では私達は無力にほぼ等しいのだと感じさせられました。最後には案内人さんから、ほとんどの人が知らない原爆資料館と平和祈念像との繋がりについても教えてくれました。

感想

私が長崎平和の旅に行って率直に思ったのは、長崎と広島原爆がどれほど恐ろしかったのか、そしてどれほどの人々を傷つけたか、それを考えただけで胸が苦しくなりました。それと同時に、多くの人々を傷つけた原爆の事をあまり知らなかった自分がまだまだ無知だと知りました。今年はコロナ禍の中で行われるかが、行く直前まで分かりませんでした。長崎に行けて、原爆の怖さや恐ろしさが身近にあった事を知ることができて良かったと思いました。最後になりましたが、このような経験をさせていただき本当にありがとうございました。